

TEA 実践編

複線径路等至性アプローチを活用する

安田裕子・滑田明暢 編
福田茉莉・サトウタツヤ

ワードマッグ

ツールとしてのTEA

どのように実際の調査研究に活かせばよいのか。
研究実践に即してその概念と活用の仕方を丁寧に解説。
保育、教育、看護・介護、心理臨床、経営、障害教育等、
多様な分野のTEAの活用例から学ぶ、TEA入門。

新曜社

ワードマップ

TEA 実践編

複線径路等至性アプローチを活用する

安田裕子・滑田明暢 編
福田茉莉・サトウタツヤ

新曜社

まえがき

過去を未来へつなぎ、人と人を結び

TEA（複線径路等至性アプローチ）は、時間の流れとシステムを捉えるという特徴をもった、過程と発生を捉える質的研究法として発展してきた。それは、方法論としての精緻化の展開過程における、多くのみなさまの協働的な学びと理解があつてこそ、である。そうしたありようは、『ワードマップ TEA』の出版に向けて、2014年2月末に1泊2日で福島にて開催した討論会合宿での熱く実り豊かな議論にも、象徴的に示されている。そして新曜社塩浦暉社長は、濃厚なポリウムある内容を【理論編】【実践編】の2冊セットで刊行するという英断を下してくださいました。

ここでは、本書『ワードマップ TEA 実践編』の構成を、簡潔に説明しておきたい。【実践編】は、「第I部 研究実践とそこからの生成」（1章から3章）と「第II部 研究実践におけるTEAの可能性」（4章と5章）により成り立っている。

まず1章では、「TEAの実践」と題し、TEAとは何か、ということをはじめ、基本的な諸概念について、できるかぎり研究実践に即したかたちで解説されている。TEAを用いた分析のやり方のひとつとして参考にしていただければと思う。なお、TEAの特長のひとつは、諸概念を通じて、実存する人のライフ（生命・生活・人生）

フィールド
や場の有り様を丁寧に捉えることができる、というところにある。実際に、インタビューにせよ、観察にせよ、収集したデータを丹念に捉えようとする試みのなかで、各概念が生み出されてきた。分析を手続き化し遵守すればそれでよし、とするのではなく、手続きを確認し、概念の定義を理解し活用しながら、関心がもたれている事象がどう捉えられるのかという視点を培う姿勢を大切に、読み進めていただければ幸いである。

2章「TEAの、研究への適用への拡がりから」では、TEAを用いて研究をしてこられた方々の研究を紹介するかたちで構成した。TEAの、時間の流れを重視し文法的・社会的文脈を捉えるという特徴に可能性と魅力を感じてくださった方々のご専門は、複数の学問分野にまたがる。文化心理学を土台にはじまったTEAは、教育心理学、発達心理学、臨床心理学、スポーツ心理学など、心理学のなかでその適用に拡がりをみせている。と同時に、心理学を越えてもいる。本章で描かれている研究実践の蓄積により、保育学、社会学、看護学、そして経営学などへもつながり拡がりゆくこれまでとこれからの可能性が浮き彫りになっていることを、ここで実感していただけるだろう。

3章「TEAで研究をプロモート&アクティベートする」でもまた、TEAを用いて研究を行った方々の論考を紹介した。章タイトルにあるように、とりわけTEAによって研究がいかに促進され活性化されたのか、という視点を織り交ぜて執筆いただ

いた。2章と同様、その構成は、多様な学問領域、専門にまたがっており、研究内容と研究法の用い方という2つの観点から、拡がりのある知見が埋め込まれている。

4章「研究実践との往還から」では、TEAによる研究を実践するうえで明らかになってきた法則や分析過程での工夫、システムを捉えるということがいかになされるのかということ、他の分析法との併用可能性、そして、時間を捉えるという特徴を応用したツールのさらなる開発など、研究実践の蓄積によるTEAの多様な深化と拡張が描き出されている。本章が執筆されている基盤と方向性は、一方で理論的でありまた一方で実践的である。その意味で、これからのTEAの精緻化に多面的に資するものにもなっていよう。

5章「実存にアプローチするフレームとして」では、TEAのものの見方を適用することによって、アクションとして、実存する人や場に迫る可能性と実践が豊かに記述されている。フィールドワークをする、ジェンダーを考えるなどといった、研究を推進するうえでメタ的なものの見方が論じられているのは、TEAの中心となるTEEMを組み立てる諸概念が、思考を促すツールとして生きているがゆえであるだろう。各概念を通じて現象にアプローチしたりものの見方を鍛えたりすることがめざされているという意味において、究極的にはTEEM図として径路を描かなくてはならないわけではない、とも謳われていることを、ここで言い添えておこう。またこの章では、そうした思考を促す側面を存分に生かすかたちで、教育的なワークにTEEMやT

E Aを援用した実践活動が展開されてもいる。

本書では、このように、T E Aの実践的な可能性とその実際が、多面的・多層的に描き出されている。また、多くの方々に寄稿いただくことよって、有り難いことにこれから取り組むべき課題もみえてきた。T E Aによる研究を通じて、T E A研究自体の、過去と現在と未来をつなげてくださった、理論編を含む執筆者のみなさまには、感謝するばかりである。また、執筆くださった方々以外にも、これまでT E A研究に参与くださり、研究活動の有意義な実りの場を共有くださった方は数多い。本書『ワードマップ T E A』——理論編も実践編でもある——の校正に協力くださった方々もいる。誠に有難いかぎりである。可視化されにくいながらも、T E Aを支えてくださる方々あつてこそであると感じ入っている。この場をかりて、さまざまに関与くださるみなさまに、心より御礼申しあげたい。そして、読者のみなさまには、実践編と理論編とをあわせてご一読いただき、T E Aのもの見方より、人のライフの豊潤ほうじゆんさに接近できることを実感したり、おもしろいと思つて研究活動に参与いただけるのなら、それは望外の喜びである。

2015年2月

安田裕子

TEA 実践編——目次

第I部 研究実践とそこからの生成

1章 TEAの実践 3

- 1-1 複線径路等至性アプローチ 方法論的複合体としてのTEA 4
- 1-2 EFPとセカンドEFP 等至点の再設定の可能性 8
- 1-3 分岐点 人生径路における分岐とその緊張関係 13
- 1-4 必須通過点 径路の多様性と異時間混交性 21
- 1-5 促進的記号と文化 発生の三層モデルで変容・維持を理解する(その1) 27
- 1-6 行動と価値・信念 発生の三層モデルで変容・維持を理解する(その2) 33
- 1-7 複線性と多様性を描く地図づくり TEAによる分析の流れ(その1) 41
- 1-8 径路の可視化 TEAによる分析の流れ(その2) 47
- 1-9 緊張状態のあぶりだし TEAによる分析の流れ(その3) 52

2章 T E A の、研究への適用の拡がりから 61

- 2-1 保育実践① 保育者の保育行為選択 いざこざ場面にどうかかわるか? 62
- 2-2 保育実践② T E A で捉える子どもの遊びの世界 サウンド・エスノグラフィの実践 70
- 2-3 保育実践③ 子育て課題のある母親の発達と支援 母親の変容を支える 79
- 2-4 看護・保健実践 10代で出産した母親の妊娠から出産までの経路 85
- 2-5 大学教育実践 卒業演習における教師と学生とのかかわり 92
- 2-6 心理臨床実践 不登校体験者のたどったプロセスの分析 99
- 2-7 矯正教育における音楽療法実践 意味生成と変容を促進する記号としての「大切な音楽」の語り 106
- 2-8 スポーツ実践 オリンピック選手の4年間の体験 114
- 2-9 経営実践 専門職大学院ビジネススクールの学びによる職業的アイデンティティ変容の可視化 120

3章 T E A で研究をプロモート&アクティベートする 127

- 3-1 青年期の課題と発達臨床 ひきこもりを抱える家族におけるきょうだいの内的変容過程 128
- 3-2 グローバリゼーションと進路選択 大学進学を希望する私費外国人留学生の進路選択プロセス 132
- 3-3 キャリア支援と臨床 自己志向的完全主義傾向がある学生の就職支援の検討 138
- 3-4 障害児の理解と教育 特別支援学校教師の「自閉症児の理解を深める視点」の生成過程 144

3-5 視覚障害者の生活自立 高齢視覚障害者のIT機器利用 152

3-6 介護家族の意思決定 経口摂取困難な高齢者への人工栄養導入をめぐる介護家族の意思決定過程 157

第Ⅱ部 研究実践におけるTEAの可能性

4章 研究実践との往還から 165

4-1 1/4/9の法則からみたTEM 事例数が教えてくれること 166

4-2 トランスビューの視点 TEM図を介した語り手と聴き手の視点の融合 172

4-3 家族を描く発生の三層モデル (TLMG) 錯綜したシステムの文脈への注目 178

4-4 KJ法とTEM 時間をインボーズする 186

4-5 GTAとTEM 2つの方法論の立ち位置とコラボレーションの可能性 192

4-6 テキストマイニングとTEM 構造への着目と変容への視点 200

4-7 供述分析とTEM 3次元視覚化ツールへの昇華 208

5章 実存にアプローチするフレームとして 217

5-1	エスノグラフィ（アクションリサーチ）を実践する	TEMを導入したエスノグラフィの可能性	218
5-2	ジェンダーに気づく	TEMを用いた社会文化的役割の理解へ向けて	223
5-3	キャリア・アイデンティティ・ワーク	カウンセリング・ツールとしてのTEA	229
5-4	保育カンファレンスに活用する	対話や実践知の交流を促すツールとしてのTEM	240

あとがき 245

索引 (1)

装幀 加藤光太郎

第I部

研究実践とそこから
の生成

1章

TEAの 実践

複線径路等至性アプローチ

方法論的複合体としてのTEA

■TEA（複線径路等至性アプローチ）（TEM、HSI、TLMG）とは何か

TEA（複線径路等至性アプローチ）は時間を捨象せずに人生の理解を可能にしようとする文化心理学の新しいアプローチである。TEAは構造（ストラクチャー）ではなく過程（プロセス）を理解しようというアプローチであり、「複線径路等至性モデル（TEM）」、「歴史的構造化」招待（HSI）、「発生の三層モデル（TLMG）」を統合したものである。TEMは等至点（EFP）に至る複数の径路をモデルとして描く方法であり、等至点に対する径路の分かれ道が発生するのが分岐点（BFP）である^[1]。また、等至点の設定は研究テーマを設定することでもある。HSIは対象者選定のための枠組みであり、等至点を経験した人を調査にお招きすることである。TLMGは分岐点において変容や維持が生じる際の自己に関する仮説的メカニズムである。全体の統合モデルは以下の図のようになる（図1-1）。

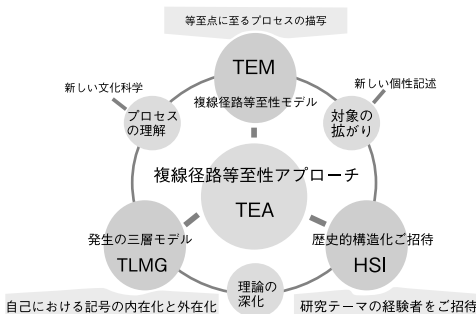


図1-1 TEAの3つの要素
TEM、HSI、TLMG

[1] [1-3 分岐点]を参照。

■ TEMと非可逆的時間

TEAの中心はTEM（複線径路等至性モデル）である。TEMにおいては、横に一本→を引いて、**非可逆的時間**を表す。この概念は哲学者ベルクソンに由来するもので、彼は時間を空間のような実在として捉えてはならないと述べている。したがって、→を引いたからといって、時間が実在するとか、その長さを計れる、というようなことを意味しているのではない。時間を単位化したりせず、ただ質的に持続しているということのみが重要なのである。時間の本質である持続の有り様を、平面図上の→として表しているのにすぎないのである。^②（時間の次元は縦でも横でもいいのだが）あるひとつの次元を、時間を示すために用いるところがTEMの特徴である。ただし、ひとつの次元を時間に用いるのであれば、それはタイムライン・年表と変わらない。もうひとつの次元を設定することこそ、TEMの重要なポイントなのである。

■次元設定における等至点と両極化した等至点の意味

ベルタランファイ^③に由来するシステム論において等至点とは、そこに至る径路がたとえ異なっても、等しく至る点、ということの意味している。

しかし、TEMにおいては、等至点は第一に、研究者が抱いた興味関心を示すものとして機能する。大学院入学、車を買って替える、いじめられ経験から立ち直る、など、研究者が研究したい現象こそが等至点なのであり、その経験をした人を招待して（歴

②偉そうに言っているが、TEMは一種のコロンパスの卵のようなものであり、言われてみれば「なあんだ！」というようなことである。

③L・v・ベルタランファイ／長野 敬・太田邦昌（訳）1973
「一般システム理論——その基礎・発展・応用」みすず書房
Ludwig von Bertalanffy 1968
General system theory. New York: George Braziller.

史的構造化」⁴⁾招待：Historically Structured Inving = HSI）そこに至る経路を描いて
 こうというのがTEMである。

両極化した等至点 (Polarized EFP: P-EFP) は、等至点に対する論理的な補集
 合として設定されるものである。たとえば「大学に入学する」という等至点に対して
 は「大学に入学しない」が、両極化した等至点として設定可能である。この設定によっ
 て、非可逆的時間の次元に対して、それに直交する次元を設定することが可能になる。
 グラフィック表現としてのTEMは、時間の次元と「等至点」両極化した等至点」
 の次元、という2つの次元を設定することにより、径路をダイナミックに捉えること
 に特徴がある。ただし、両極化した等至点を単に等至点の論理的補集合として設定す
 るよりも、当事者の意味づけを反映した両極化した等至点を探究することが、よい質
 的探究を行うための鍵となる。

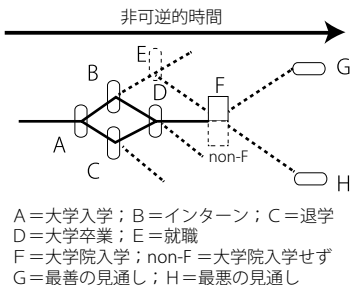
■ 大学院入学を例としたTEM

図1-2の模式図は大学院入学を等至点とした例である。⁵⁾ Fが大学院入学であり、
 これが研究者にとつての等至点の設定であるから、この経験をした人に話を聞くこと
 になる。ランダムサンプリングなどを行うのではなく、自分の研究テーマに合致した
 方をお願いして話を聞かせてもらうということが「歴史的構造化」招待」である。
 そしてA（大学入学）からF（大学院入学）には多様な径路がありうるし（大学院入

〔4〕傲慢だという誇りを覚悟で
 言えば、このHSIによって心
 理学ならびに関連諸領域は学問
 の研究対象を飛躍的に拡大する
 ことができたのではないかと思
 う。先行研究ではなく、自分の
 興味を研究することを可能にし
 たと思考するものである。

〔5〕サトウタツヤ『TEM』青
 M 茂呂雄二・有元典文・青山
 征彦・伊藤崇・香川秀太・岡部
 大介（編）『ワードマップ』状況
 と活動の心理学——コンセプ
 ト・方法・実践』新曜社

図1-2 TEM (模式図)



学しない選択もありえた)、社会人になってから大学院に行くという径路の人がいることも理解することができる。さらにF以降、どのようなことがあったのかについても話を聞くことができるなら、大学院入学者にとつての新たな未来展望を理解することができる。それが新たな設定としての等至点(セカンドEFP)^{〔6〕}であり、図ではGとなっている。またそのGの両極化した等至点としてHが設定されている。このGとHが十分に納得できるものとして描ければ、TEM的な飽和(saturation)が達成できたと言え、研究を終結させてもよいという確信がもてるのである。たとえば、ある人にとつては高校の教員になるということがGだとする。このとき、両極化した等至点は単純に設定すれば「高校の教員にならない」ということである。しかし、それでは高校教員になることの意味をくみとれない。塾の講師にはなりたくない、とか、親の脛をかじって生きるのは嫌だなどということがあるはずであり、それが両極化した等至点として明確になるならば、TEAにおける飽和だと言えるのである。^{〔7〕}

また等至点の前にはいくつかの径路の分かれ道が存在する。あるいは突然新しい選択肢が現れたりする。それが分岐点である。分岐点においては新しい促進的記号が発生していると考えられる。促進的記号の発生が人を新しい選択肢へと誘うのである。そして、発生の三層モデル(TLMG)は、TEAにおける「自己のモデル」である。たとえばD(大学卒業)においてどのような記号が発生したのかを分析したければ、この時点におけるTLMGを描いて理解を試みることになる。^{〔8〕}

(サトウタツヤ)

〔6〕「1・2 EFPとセカンドEFP」を参照。

〔7〕「1・2 EFPとセカンドEFP」を参照。

〔8〕「1・5 促進的記号と文化」および「1・6 行動と価値・信念」を参照。

■参考書

サトウタツヤ(編著)2009「TEMではじめる質的研究——時間とプロセスを扱う研究をめざして」誠信書房